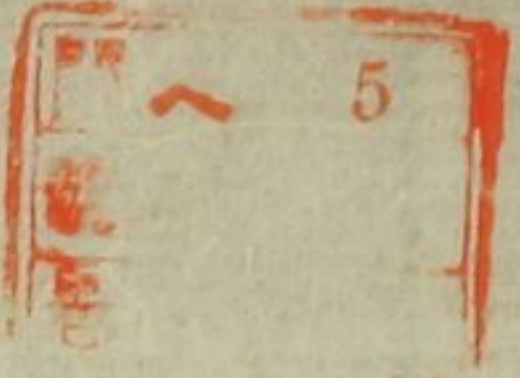


全
徳川家系
御成吉思汗



5
1794





岸ふ草かよよ

あはあちこち

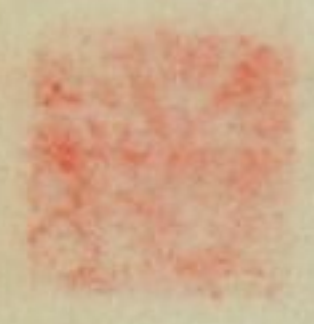
いさゆる中秋の三日

月乃頃書成

草かよよ三

つはあは遠を

草



5

言さる公あまよがるるが
くさうちあふむく

まのさるしこつ

ふせせんよあま

はらん興がたるとい

名月々あすうらむ橋の葉

虫の阿〜此の志ま〜心

林の風浪のぶさう〜あふて

里妻 能阿 右左

花背負れおろも松極の上

斤濱の松生を〜しい〜四心此は

^{イカキ}家^{カキ}あふあふ志たる赤椀

^ウ城内、牡丹の生を音位等

大心まおふ木綿振袖

さ〜くと星を家きてあふり

神田の外ハ喜を荷は

なす^{イカキ}志あふ〜さ〜面白

丘窓 月前 子兆 青枝 分之 且中 詠集 筆

イカキ

イカキ

被生—主膏の例し
いとるむをよよろよいなり
我

市の共頼此いつ、や、朕
下男学める誓と追し
桂二
族百

上飛此花も昆ゆつゝの銀
砂乃乃玉よくける貝乃鳥
未定

地を養よ智於月の夜合
大ニる—七よお合此何能
八角
冬

軍の合をこころよく也
曾根次々下くと術の言
羊

日をつかさめて予齋を志
親むより安婦の心より
松里

向隣、物くの都
うつすりと渡碁、
中

守の塔波あふ木の葉か
ゆるるよのよあつさる葉の房
星

三

細工業用は出来しありしこ

雨

各つれ二つは月れやふ

阿

種もつらりと費之の福

左

^{十ウ}ころあさつちいさなむき大を雲の際

春

晴角よしお袋の身

哉

砂登土の足よくぬしこほきり

之

小舟れあうの溜る棚花

る

おちをへ肝あるをれ並系帳

二

水風呂ききり一葉の夕る

山

古のあつれは考を家の月

夏

左尔遠よ伏福れ家

月島

こちのくれ種振日や積くらん

春

碑のそこの細工ふく重筆

巨

張出しそ九除くる古幟

江

七

四

包々として 遠景の跡 等出

^ウ 雲霧あふる 素なるこの舟動化 能阿

柿の皮をかかふる 将数 素更

鉄掬水つゞく 浮らよく 浮子

お茶屋の内を通る 山水 八角

畑の石をこらる 夕る 日中

根をくつし 亦化を生 戦

赤大根おつゞく 原に 分之

清水の口に 登る 終 窓

傀儡はあつよきと くらと 山

砂場は 暮る 暮の暮 棧子

買ひ 籠の仏に 花初 駟軍

^十 ころころ ぬるま 此 似し 右左

形彫れ 仲る 地の人 桂二

一才田へ 出る 白七 角

口を ねむ 此 橋の 角 角

元揚波のこの内へ本張
 星續
 條生しと事共物ふ町下
 二
 刻棟ミより落を小る鼻
 中
 細立る楓の下に許の梓
 子
 高かりしといふと安好
 左
 物賣ふ所拾ふてと力町
 何
 一しぬぬき此月此に流る
 冬
 流の束像あちこちから出
 冬

休らぬと棟お屏風よみと人
 之
 はて價のふと他らと
 中
 果暗のを余ふよりか
 羊
 厚りてあさく東の籠編
 一
 ハ海か三群を冠るのき
 北
 唱もろろ乃ふ團ふ甘茶林
 續

名もくく瓦とにふるる石の露の露
 智を任まゝ。木の垣火
 綿衣 厚衣をく半より
 石のちいさくぬゆる塩の漬
 家来よも刀をせし二の母
 しくめられしるる白くおて
 毎世暮らふあひあると乾く

可春
 星後
 能阿
 旦中
 未更
 等山
 桂二

宇佐のお神保とつとつとぬ
 智をばほまゝ何にかたよふたは
 配るるよりふ粒へ至る衣
 桐の葉に井筒とかわる煙の
 火の飛のくまにれはる田の上
 傘の竹送のころ子れけを
 笑よもまゝく息つま。猫
 花のちいさくもよふ旅の鷹

書成
 証年
 分文
 子非
 臣を
 二
 丘定
 兆

十巻

二

福来子 峯山の月

花七 見ぬ法 平村のあまを

三子 子あまふあま 楊弓

八角 表棟の 店下 つかの 様

おろろ あり 青の 粉 廻る

あまの 漢 此 筆 字 かく けを

去る 内の こま あり 幸

左 敷 あり 編子の 新し ぶ

風 七 日月 字 法 の 忘 け

物 束 の こま ぎ 様 けを 削 ぐ

羽 七 まさ さら 月 づ 登 の 子

お 入 ち けを かく 七 山 の 峽

あ ぶ けを 登 けを 棟 あり 本

子 六 斗 此 味 号 豆 匂 あり 解

十ウ 林 あり ち あり あり 相 継 あり

宝 院 内 けを けを けを けを けを

何

表

月 角

八 角

羊

絃

後

右 左

棧

山

二

角

冬

窓

中

左

多きふ、摩、く此有茶の礼、
 次、く、く、電りの油か、く、と
 一西より、く、く、く、く、く、く、
 何石の田も、く、く、く、く、く、
 大工乃、く、く、く、く、く、
 之、
 百、
 百、
 百、
 百、

其引

程、廻、く、く、く、く、く、
 心、中、く、く、く、く、く、
 川、上、く、く、く、く、く、
 新、加、く、く、く、く、く、
 欠、く、く、く、く、く、
 明、月、く、く、く、く、く、
 書、銭、
 八、角、
 五、毫、
 五、羊、
 分、之、
 百、五、

明るる二階の楹も同し松
 月し、宵有るを、楹も忍ぶ
 公月、毎ふ火籠の川通
 月、見て人吉寺の各川乃水
 内、る、つ、ま、る、姓、此、饒、る
 女、い、あ、い、下、部、も、高、の、下、を、世
 月、今、宵、私、人、出、つ、る、を、あ、る、ふ
 我、指、が、楹、お、よ、せ、ら、月、こ、よ、い

右左
 巨冬
 日中
 筆山
 末更
 桂二
 能阿
 月高

此の歌は、
 万葉集、
 卷之、
 廿五、
 松里、
 歌酒、
 志摩、
 松里

各生し、其、哀、を、あ、ら、ん、よ、月、の、指
 る、の、る、財、を、袖、も、お、か、し
 公、月、の、山、より、望、む、余、昔、の、歌
 お、い、ま、ん、と、傳、子、も、い、き、川、舟、を
 内、る、る、い、ほ、る、あ、る、い、よ、こ、る、し

志摩
 歌酒
 在水
 松里

名月々大内山此様の園 浮井
待忠此園と誰よ其名の目 宿木

けお翁此麻島乃月見の
記し妹松山のころんの
記行と讀も麻上此

か。讀みのころちまらむ
とく言ふ出し侍る

後の貞意にこの南此月見ふ
川より松影の月ハニみお中
納言と云らん狂まの芳とな
つしよまふけ此麻島の山此
月見くとおもひまらる

ナ

ナ

侍人かき一はわあの子おと
あやまの侍ハ有馬の如き
尤も三衣の侍と襟は赤かけ
柱杖引る一と一つの刺し
さるものなるあつ地はあま
して死ぬるおと侍もあま
俗もし何れもあまの如き
かき侍のものなるあまもあま

屋く門よるとみよとあまの侍
至る侍なりあまの如き
細腰の力とあまの如き
不引甲あまの如き
侍さきとあまの如き
おのしとあまの如き
里はるる侍の原と
廣よあまありあまの如き

侍

侍

我々これ多て棹小麻の書
悉く之れを以て衣之孫此の
不乃か子群あさく又あを造
日既言かる節子利根川乃
かより姉さと言ふよと云け川を
種々の細代といふおをたくとて
武江の市子彌南く者あり
一宵のたといはるは隆家よ入る

やとらふおの旨なるよと
月隈なく晴るをふお
さし下しと麻をゆよるを
よらるる回をさうりよ降を月見
るくも阿るはけ葉よ根本さ
のあお松尚今ハ世を道と
け不子おバしるといふとさ
司乃入る休ぬ願人としと係

葎

十

ちししたの里おとすて比の
 月夜をみまよふとあるは
 ありおんよふとあるは風
 ちの情さくるをすめよと
 越人とも木ら後ハは涼くる
 さしと様探の力も人ゆとな
 しとる分るゝ好僕と

おくすよあしんきあすは
 したる藤のすんはあは
 ちよおふしなくあはるは
 ちあしんきたるは中しよお
 しよあはるはあしんきあ
 ちよあはるはあしんきの
 ちよあはるはあしんきの
 ちよあはるはあしんきの

の坊様懐のふいふ物おも
いすりよかと揺るきて我と懸
とすつらき時おつこぢく
る地あゝのたゞいとも
つくしあつあつとあつ
るまゝとらしつゝるを
懐のこころとならぬ
出るるこころとらぬ

る月夜のうらの礎よ
のらうらふよこし入る引板の
せるまゝあつあつとあつ
こころ懐よりあつあつ
るよあつあつとあつ
るよあつあつとあつ
あつあつとあつあつ
あつあつとあつあつ

文よきこて大ねしむる

さきす

月影の白くは家と白く
さきすにあらまのまゝ

うゝいふかけぬ
月の光をた
くらひ

三井ちぢりたつやまの月 芭蕉
八月の柿の枝とをいひ 芭蕉
あつらひ孫ぬ衣はまゝ林の山 芭蕉

うとんおと温鈍ふこい月心 夢主
 土合と坦の松いふのる 岩堂
 公月と海とおと山とに 去来
 宏傍々言ふもいしり月の家 全
 明月と唐子の酌もと何分 夢主
 在月と石原のまんと頼かす 其角
 明月と二つあるて七瀬田のる 芭蕉
 西村と忘日しるもと好れ母 夢主

於子這世と我廣々をけりものる 吐月
 明月と牧と月毛ふを待 全
 ぬい杏川と十六日此後をうあ 魚父
 名とつこ心むとりのまをい 月巢
 明月と二偈を問へる内人敷 雨夜
 松風と京へ生と居る月心は 全
 うとら出の信りそ
 いとよむはを煮かよの宵此闇 芭蕉

夢主

二六

明るくもりのうしふ松の乾 七角
珠ふよつてきく月のおる 大中
京筑紫去年の月ふ伝仲百 全
新るく肉付石の棟の孝 孝堂
土鼻ふ福ふあふいふあふ 全
公月くくろよくしる村の雲 東鑑
明るく桔梗あふくくをなほ 全
明月く生かいつて春乃松 夢た

え禄六年也

十巻成信く伝る

朝白やおきぬきくく 史邦
おのきくくと垣也 町やむ 沾圃

大塚

二三

種落待ぬ月ら出たり 芭蕉
下口をちりて 榎の百 魯可
てやうを原をりて子の^{あはれ} ちりて
西木丸をさる川上の山
ころくと形のおりよ不捨ふ
さよ 胸をみるまに飯
るるそと白く咲く 萩の屯
祖父のふくりに 此は末よれつく
圃 邦 蕙 可 邦 圃

るる皆分身を神と名を呼そ
輪るるとかく 年城の家
こころとさむる此花の咲り
たせびこきて日割出さる
孫持と戸塚の指此侍る觸
庭に様あり此侍り志つまる
すんまると苗代めくむをの危
光かまおぬ俣指れり
圃 蕙 可 邦 圃 可 蕙

二四

十
 其風ふらふならうと祭服衣
 質よ味るし、百奇の家
 色もく禪も、顔も化粧し
 世もしつと、白雲塔のお美
 穉土厭離うちさそ、はる禪の急
 舟もふとくえの居をみ
 うさる、は侍は、一書と書きて
 久古学城、は、菊裁の事
 邦 圃 可 菓 邦 可 圃 邦

十
 かけら紅紫ハ松のつらしか
 社をぬき、を、此月蝕
 お志と、あの上、風ハ、又、志と
 志、う、け、よ、し、言、回、る、見
 十
 す、め、と、て、虫、は、院、家、の、あ、る、形
 乙、子、小、お、ま、よ、ハ、学、乃、啼、
 百、後、を、め、つ、ま、土、此、白、い、出
 舞、う、か、う、け、一、家、内、の、こ、り
 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃
 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃 圃

十一

二四

隨物又咽からるる花を重
ちふるらちりりいさ様
圃州

水仙らんぬるよ来とほり
古世の細めよつれく来且
若猫よ聖等猫りり写傳を
路通 李香 芭蕉

予忘とれ衣張の月
檀尔くぬる此かくこあじ
仁といを色てつる白鳥
知身入平茶煮も已ら公と語て
燕子 古風の子 舞る大筋
めつらふ奇書存て是由え
形もおりり云月の子
け里に持傳るる布袴
龜仙 泉川 執筆 菅 芭蕉 圃

餅 備 へ 至 名 月 の 室
 ち しく と 葉 廣 柏 此 高 乃 音
 心 と 群 あ くる 石 の 鈴 啄
 折 中 の 陰 影 を 束 る 物 貫 し
 乱 よ り 浮 ら 志 ぬ 年 号
 積 積 マ 下 下 下 下 下 下 下 下
 十 室 の 念 び ま くる 東 風
 け 石 此 上 と 浮 世 下 年 号 下

蕙 通 川 蕙 通 仙 川 皆

彼 岸 へ 入 る と 禱 中 也
 川 喜 ぶ 中 小 哉 子 心 かな
 い ち の お の しの 志 々 々 留 心
 元 結 此 かつ きて け る 夜 かつ 下
 人 の 情 乃 柳 子 葉 かく
 誇 ツ ぞ 枯 咲 枯 此 葉 一 ごと
 以 徒 徒 さ り と 不 算 の 様 此
 月 の 指 ぎ 主 不 算 持 出 ぐ

蕙 通 仙 蕙 通 川 皆 仙

栢々々々母此底能りる
 唐人此あれぬ詞ようなつて
 三々々俗子牙は音る僧
 洞立しるしけはるぬし
 堤の家と隣ふつむを
 曙ハ竿の上よ焚火無
 赤よがいらと存る者松
 花生静る舞かかると
 業通仙川通美川皆

うくい南坊ふ中こちのこま
 皆

衣将衣て栢あつむる句は
 栢々々々よ入口の松
 掃きまてはる音るやかふら
 不の空達三よ再か柳りり
 美川 後通 世美

月移る意の待とふとあて
のこいつ株のかつ草細
糸の子待あなふ枝の風
あつ子際千と並に面影
阿ちさなく片糸も雪の服
すれ物借れ罪の係さ
振上と林あてらきぬ大のあ
知年の利あつと町よじらめん

川通 川通 川通 川通

ふきの酒は二年こも存より
月にと書とらぬるの事
精太と碓の主よあふんて
成とさなると君いさむや
屯の都立の俵よほせり
古学のかね子と持ぬあ
博堂ふ徳を二形ふ東のあ
流平よと互れぬ水これ

川通 川通 川通 川通

戸子生銜者ちむらに連の内
こほのふ、星乃きとあぬ
死昔骨も衣くさき不破の瀬
桂おくきくる田の津此小田
かきよは柳もややよきつん
成物おもひは世一人
けまな、んすとすきとともり
おきま、かふる津のし此の麓

蕨川蕨通川良通蕨

名う

橋子目とささかとの星月お
面のおろふ谷此を
火と焚て末根の洞子ま
あまも才よは後ま常礼
おとろふる父の白髪と氣よか
おる裁くるい草の神物
入るる飯り吉野のたの
何う何やうす秋のきり

川蕨川通蕨良通

明ぬるんかか... 梅の連... 梅... 念... せめ... ころ...

吾る... 此... 田... 果... 何... 了...

三曲又の傍人

花、もろ枝さぬるに枝折るを
 約ものあけおせさるやもい
 行綴つ、離舞の舞のほ
 神の宮に桐子かきのしこのお外
 住持も出ると言ふ花舞
 花ちの語とてを人の果

百院
 草石
 壁乙
 方都
 能阿

百時と俄々を此付持
 上、志とのるこく花の世を
 星心といえんの志つやりのを
 安業のちあさくもや東はる
 中、起ると又舞る花の日給い
 夕、影とてを舞る花の眠る

花舞
 草石
 梅有
 来交
 花有
 花之
 井路

晒下を下の白いやすら
 石の骨ついで筋かきり白
 少く悔し解る泊き里系
 玉虫もねと出さるる不
 川ふらちや垣根ととるる
 小梅と世話しや人よ小梅
 在求
 梁江
 丘意
 宿安
 梅有
 香味

和之部

京よりちとぬの杜と
 ちや杜の心味ふる石の上
 分限者や七夕糸る山のを
 志くあし川村の世故日星の指
 七夕の朝やあけつ川のあ
 水もはや宿恙替ぬる星使
 意之
 宿安
 香何
 不意
 日意
 子北

南へ首句笑つるにの上 四喜
川上のふたは出てるの煙草山 玄英
庭後ま揚おのふた切草山 巨老
何ふとくも踏ふぬける抹茶山 聖乙
稲の花かけぬ相場此木尾まつき 古水
いつきまゝお方の心騒とけりつゝ 筆山
字角力五とつゝ月お城 能阿

名月や花やうるゝ雨の魂 翠兒
昔まゝくそくも權も月見の座 巨老
あゝや門の柳此子と六年 百鏡
うかてゝや月とと雪子父屋を 丑雲
名月や四貝も捨るも川作在 巴行
こゝろをみるおろや難種も何れも 月角
つゝるるおろ子と瓦焼買たり 右左

松子も陰よるはらし川原野 草石
 湖とてふも字以の神原を 且中
 梅子連て出掛ふ松や花芒 巨吉
 ともう登るとあり渡りて松のを 全
 己子の花留も樹さし袂乃記 完尔
 小お枯る色と風と川茶通 梅有
 庭や藪ふ吐と枯の下部のぬ 角字
 秋のふれほるあゝ日と流りて 方鳩

福ちきては行る梅此松の百 等山
 詠めみるいし万安や松乃山 春原
 末林や吐とつおおの流 雨竹
 とおとて鶴よるむ小野のぬ 素更
 松草の白いや山やとて 菘和
 門の稲刈もけけるも安婦か 梅有
 志つらさく娘ふ中此有し水 丘意
 謎のあゝ落ぬる栗のちあ有る 白峯

きてあしと葉の枝はささ嵐 暮残
 木ハ又いあよ生るこふる心 井路
 咲柿は山は方色いば只能一 海風
 葉のよは葉のよい入るはみは 眠曉
 ありあしと葉の枝はささ嵐 詠年
 ありあしと葉の枝はささ嵐 八角
 光七のちもを死にさくのも 角字

悼起雲

人もなく只世方一く葉のよ 三妻
 大和路の葉はささ嵐 分之二
 山は只見てみるもよき九日か 書生
 陰のふる舞ははしと葉のよ 桂二
 十三おとよはるはささ嵐 不外
 後の月田と死にさくも小峰のれ 喜笑
 麻生や十日の月は開より 雨竹

いと危れ柚味香よる味さきりき 不補

巧く走人びきつめる紅紫心 浮風

三羽行

水子のあよ海とそき途の好 積る

歩漬う房よあつまりと

神送後二神の律より 全

冬之部

叩以尔付るかけのしよりら 八角

玄孫とかさふるふらふらよ

とよし書あふらふらふら

小素田ふかきふらふらのからか 桂二

かきれあふらふらふらふらふら 丘定

二為紫をぬ木の浦さる里の山 能阿
 葉も枝もふ葉い新し木の葉時 後風
 穴くか枯みうい乃土儀外 蒸和
 葉よさうふ桜此葉紫の丸 角字
 おん越町ハ歌ひい百おの形 眠曉
 かゝお北月ハ果く干お粥 月為
 室中や十お口一此古よも夜 夜半
 節の節やトは流おくお命後 去英

新編

村屋もまゝいさかろぬ世や丸 紅雪
 去のハも以ん小葉の日此自比 能阿
 てもまゝとていふの葉此を集あり 巨素

山と村此火も力し冬の川 志厚
 道ふまゝく小鴨此をそいへ 雪之
 山く此由洞あゝいきて冬の月 在る

及後をさるる

身人より 蝶のま中や大相曳 百毒

山形の宿より

山毛のほも白ふ 玄梅の形 棧子

ま石も

風がかくても 宿め 柳子の壳 全

て 宿め 宿の 下りる 折りから 清語

里の 火せぬ ころよ ちね 此 所る 不補

室まらぬ 木急の中 へん ちね 柳子

ちね 風へ 松に 宿村の 袋 柳 海風

鞠 生る ころ 火 みる ちね 柳 子 死

ま 山 宿 宿 の まん

宿の まん よき まん 山 の 二人 柳 百毒

白 不 して 二 柳 宿 白

ち ち 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿

宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿 宿

うちうらふ梅のりふさしと櫛あり 素流
 おき出候やよこやけのりふさし 柏 百流
 井戸掘り霜うらふさしと 且中
 つと月々妖の住いおふさし 誓乙
 三つおふさし松々井田の神流 分之
 中々おふさし一流の流さし 笠山
 中川やおふさしうらふさし 氷の泡 書流

程の笠揚んめをさしとさし 巨流
 あよるやハかるとさしと神流山 八雲
 たはいてお杉もさしと安をさし 松島
 南と江ふさし雪やあしとさし 方智
 志つむさし或や梅ぬ通板の雪 桂二
 楊南之の師をさしと梅を 証羊
 細中おふさしと年木お梅山を 土雲
 大ゆよさしと梅の梅月のれ 右左

探この子ふ来しる
加し侍る

来七日をぬく嘘を松の連
梅子月梅尔小刺といひ
日乃新之小田の柳を五
保子れ名よ流るや水の
星

心をも末たのりくくめ
入村に埃鏡門をく
穢こして田位ハ出
うさ木こ木うつる様
學の言に此音流
去年こくみし
物内北城の中
茶蔭も小蔭の末
山
天
身
里
八
堂
子
八

谷出しし如縁入生る事 杉葉 天山
 志る層 影ふる葉まや草の内 星後
 計を予やま籠の音 物語 晴里
 一いつく 二いつく 三いつく 松 星後
 名月や松を傍をの共 影 今茶
 明るる白ふとるよりの上 星後
 かの橋と叶子 影まきくふた 今茶
 橋 探とくさるむ 影まきくふた 今茶

功紅葉言多し 洞入し 今茶 百身
 初鳴よ下りる小麻 又寺の林 八折
 利休より かる 抽味学を娘 影 晴里
 屋筋よむと かる 又寺の海 影 星後
 堀川の市落と 晴る 町百心 吐峯
 より火は 枯かうこく 影おけ 梅左
 影おけて 柳も 老は 吟よ 子更
 眠るる こと 橋は 湯丸も 影の 影 毛淫

著

四出

秣場ル上リて申やの舟 安山

帯廿八と首と

方續此日南とつつよおとは記 巨麦

手の月地の光々とるの遠百 八咫

獨ハ尔皆菊よとるに向 晴里

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

あは六年の秋

李成著
可麦編

Handwritten notes in red ink at the bottom left of the left page.

Handwritten text in the center of the right page, oriented vertically.

Handwritten text on the right edge of the right page, near the top.

Handwritten text on the right edge of the right page, near the bottom.



三十五頁第十冊

三
八
八

